

全国こけし祭り

平成二十九年九月三日

鳴子むかしむかし

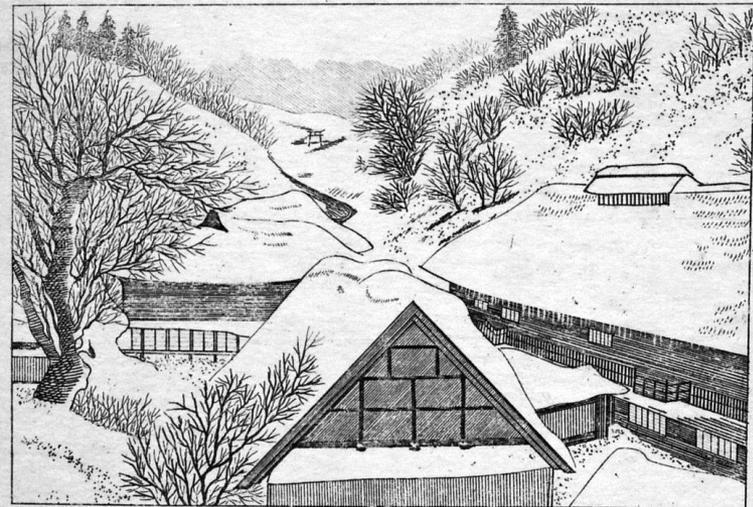
橋本正明



鳴子 昔

- 歴史上の最初の記載
続日本紀 承和4年 (837)
玉造塞の温泉石神社 (川渡)
- 延喜式神名帳
(延喜式 卷第十 神祇十 神名帳下)
玉造郡三座 延長5年 (927)
温泉石神社 (川渡) ゆのいし
温泉神社 (鳴子)
荒雄河神社 (池月・鬼首)
- 順徳天皇 八雲抄 (1220)
玉造の湯

景真ノ湯荒



温泉の盛衰

- 享保～元文年間
(1730年代)
鬼首荒湯：川渡 3:1
- 寛政年間 (1800年頃)
川渡 7～8000人
荒湯 4～5000人
鳴子 川渡の半分
- 文化文政 (1810年代)
鳴子 川渡の倍
川渡



泉 温 湯 荒

安永2年(1773)の村高

鳴子	60,121 貫文
大口	116,265
名生定(みょうさだ)	115,188
鬼首	197,284

大正五年

温泉游記

「温泉効能鑑」
東前頭5枚目
東前頭24枚目



鳴子	60,121 貫文
大口	116,265
名生定(みょうさだ)	115,188
鬼首	197,284

安永2年(1773)の村高

小国街道

羽後街道

鬼首街道

小安街道



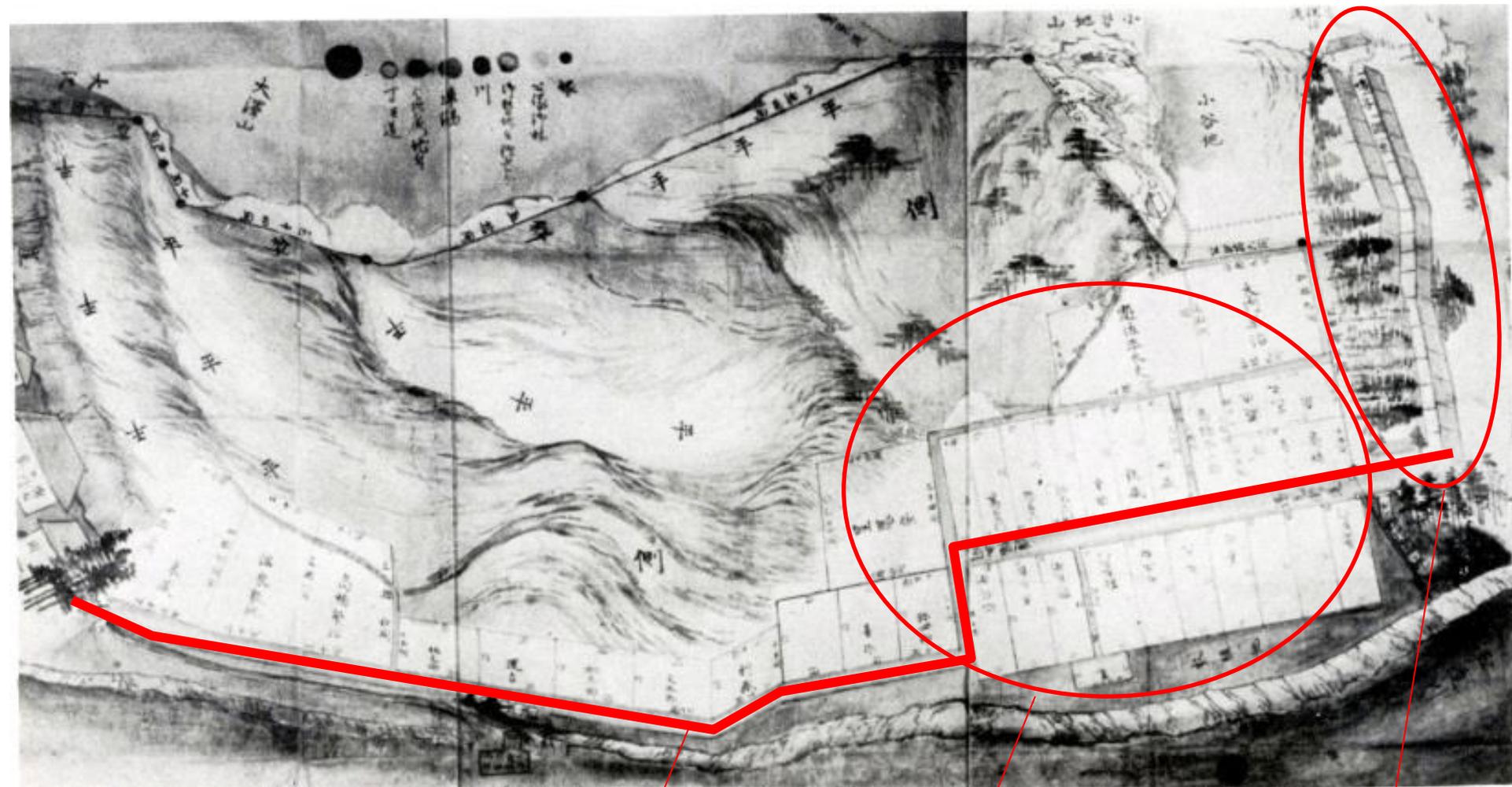
加美郡街道

出羽仙台街道宿駅 (岩出山-下宮-鍛冶谷沢-尿前-中山)
(鳴子町史では最上街道)

加美から軽井沢峠越えて銀山に出るルートも「最上街道」と呼ぶので「出羽仙台街道」が一般に使われる



メインルートは出羽仙台街道
湯元の坂は川の南の街道（湯元街道）の
終着で、行き止まりだった



弘化3年 鳴子

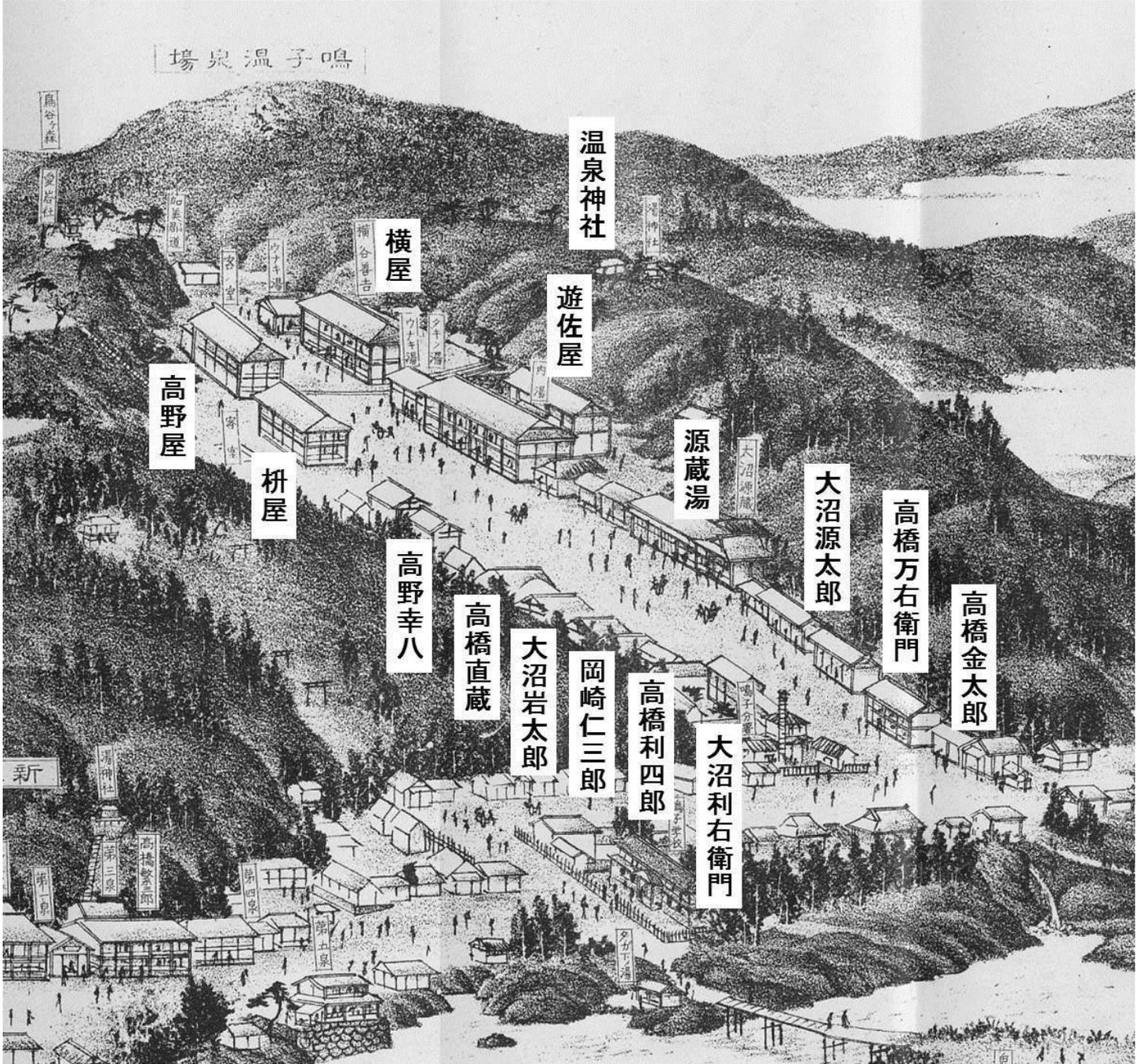
湯元街道

新屋敷

天保15年 鉄砲組36人

天保12年 庄内の農民商人の侵入が契機

湯元



明治二十四年「陸前国玉造郡温泉村八湯志」

温泉村八湯志に沢口悟一古地図の家名を合わせてみた

鳴子歴史年表 (1)

承和4年	837	湯山爆発 湯沼の形成 温泉噴出・川渡 塞の温泉石神(続日本紀)
延長5年	927	延喜式神名帳 玉造郡三座(荒雄河神社・温泉神社・塞の温泉石神)
文治2年	1186	源義経 奥州へ落ちる(亀割峠)
慶長3年	1598	遊佐長門 鬼首荒湯の湯役上納
寛永13年	1636	遊佐氏 鳴子で湯治人宿開設
元禄2年	1689	5月15日松尾芭蕉・曾良 鳴子対岸を通過
享保13年	1728	本山銅山より石巻鑄銭場に銅を送る
宝暦3年	1752	洪水
宝暦5年	1754	大飢饉
宝暦7年	1756	飢饉
明和6年	1769	大洪水 被害甚大
安永6年	1777	南部藩士富田伊之「奥州紀行」に鳴子の印象を記す
安永7年	1778	鳴子各村「風土記御用書出」成る
天明3年	1783	大飢饉 餓死者多数
天明5年	1785	大暴風雨
天明8年	1788	大雨洪水
寛政2年	1790	大雨洪水
文政10年	1827	水戸藩士小宮山昌秀「浴陸奥温泉記」を書く 「諸国温泉功能鑑」 東前頭五枚目 鳴子
		氏子駆帳 中山(初之進以下10軒) 鬼首(善吉以下6軒) 荒湯(六兵衛以下4軒)
天保4年	1833	大飢饉 連年 餓死者多数

鳴子歴史年表 (2)

天保12年	1841	6月 庄内一揆 尿前に殺到 岩出山藩主説諭して返す
天保15年	1844	岩出山伊達家 鳴子に新屋敷を開き、鉄砲組26人を置く
弘化3年	1846	高野又五郎 源蔵湯大沼三郎治の婿養子となる 大沼又五郎 小田原から招聘した木地師に技術を学ぶ
嘉永元年	1848	藩士油井元雄「赤梅温泉記」を書く
安政4年	1857	伊達家文書「北方御郡日記」 鳴子の記載あり
文久元年	1861	先代の国学者 保田光則「撫子日記」に鳴子の印象を記す
文久2年	1862	鬼首の肝煎長蔵 節約令の具申書に「こふけし」を記す
慶応4年	1868	奥州同盟の戦い 大沼岩太郎 仙台で木の砲丸を挽く
明治2年	1869	大洪水 大不作 収穫皆無
明治3年	1870	大干不作
明治4年	1871	廃藩置県 藩札回収令 大沼又五郎による水澤縣の木地講習
明治5年	1872	大干不作
明治11年	1878	大洪水
明治19年	1886	3月19日 湯元の大火 温泉宿商店12軒全焼
明治21年	1888	沢口吾左衛門文書 木地挽29名記載
明治22年	1889	大洪水
明治30年	1890	テト馬車の開通 (岩出山経由の定期便)
明治31年	1898	暴風雨大出水
明治43年	1910	大水害 鳴子川渡 死者110 行方不明28 流失家屋173 崩壊家屋156
大正4年	1915	鉄道開通 鳴子駅営業開始

仙台藩の経済政策

寛永3年(1626) 「買米仕法(かいまいしほう)」

- 農民が領主への年貢を納めた残りの米を藩が強制的に買い上げ、これを江戸の市場へ売却することによって利益の独占をはかった政策

享保十二年(1727) 伊達吉村の経済立て直し (先代綱村の失政回復)

- 「寛永通宝」を石巻で鑄銭(仙台領産の銅)
- 買米仕法の再編強化

宝暦五年(1755) 飢饉

天明期(1782-1787) 冷害、水害仙台藩では餓死者が三十万人

- 金方御用 大阪商人 升屋山片平右衛門が銀主になる
番頭 山片蟠桃(小右衛門) さし米制度 米札(藩札)
- 文化文政の経済安定期
山片蟠桃 文政四年(1821)に亡くなる

銅山

山片蟠桃の升屋が資金を出して採掘した銅山

金山山神社には升屋が文化11年(1814)奉納した石燈籠が現存している

熊沢鉱山金山山神建立場所俯瞰図



「浴陸奥温泉記」小宮山昌秀
文政10年（1827）

コレヨリ成子ニ入レバ人家多
クアリ、売店モアリ、木地引
アリ、
漆器ヲ鬻グ店多シ・・・

ソレヨリ石階を上ル、左ノ方
ニ大ナル硫黄山アリ、草木生
ゼズ、
只硫黄累積シテ山ヲ成セシナ
リ、是所謂温泉神社ニテ延喜
式ニモ見エタリ・・・
成子ニ明礬ヲ煮ルアリ、床下
ニ生ズルト云リ・・・

花淵山ノ本山ニ銅山アリ、今
盛ンナリ。遊女モ坂田ヨリ来
タリ居ル



「風土記御用書出」 鳴子村（安永7年 1778）

- 一、 銅出る山々在り
- 一、 明礬相出申候
- 一、 鳴子ぬりもの
- 一、 鳴子の箸楊枝
- 一、 鳴子の木地挽もの



「封内土産考」 寛政10年（1798）

- 一、 檜物 一の迫鬼首村より出る
- 一、 挽物 木地挽は 氣仙木地山、刈田熊澤、一の迫鬼首より出せり。
- 一、 明礬 玉造郡鳴子温泉にて是を取れり。
- 一、 硫黄 是又同所。鬼首荒湯の温泉にて采れり。
- 一、 紺青 一の迫鬼首荒湯に近き所より出づ。
檜物（ひもの）＝檜で作った曲げ物



鳴子温泉 温泉神社

岡戸正憲「こけしの郷のむかし」



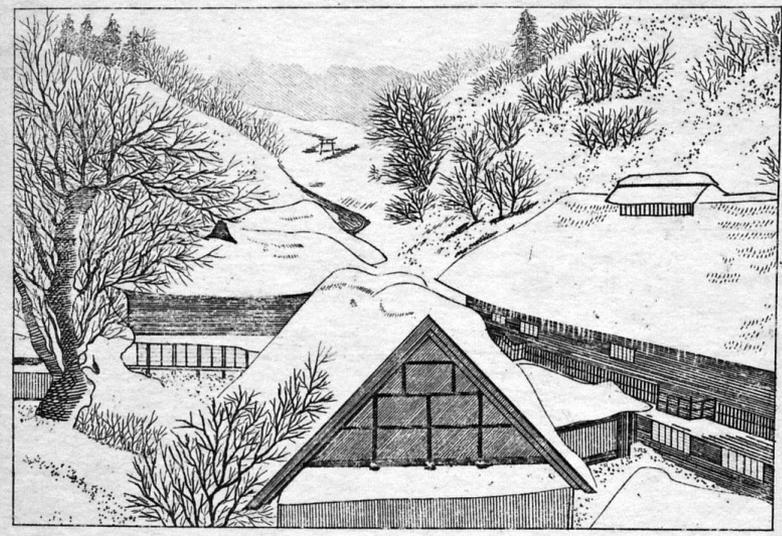
昭和40年
鳴子温泉神社より瀧の湯

「撫子日記」保田光則 文久2年（1862）

坂を下りてまた町をゆく。家數百餘も有るべし。ひき物まけ物およそのうつはもの。ぬりゑかきたるうる家々有。こゝに來たりし人はるなう川度赤湯など來りし人にも。ゆあみの家つとをは。大方こゝに來てかひゆくぬり。こゝにてうる器共八十か九。鬼首村にて造り出せるなり。

るなう＝論なく

景真ノ湯荒



文化10年 (1813) の木地屋



善吉以下6軒

鬼首木地山

鬼首荒湯

六兵衛以下4軒

鳴子

小豆坂

尿前番所

中山

友五郎子 初之進以下10軒

花山

小僧

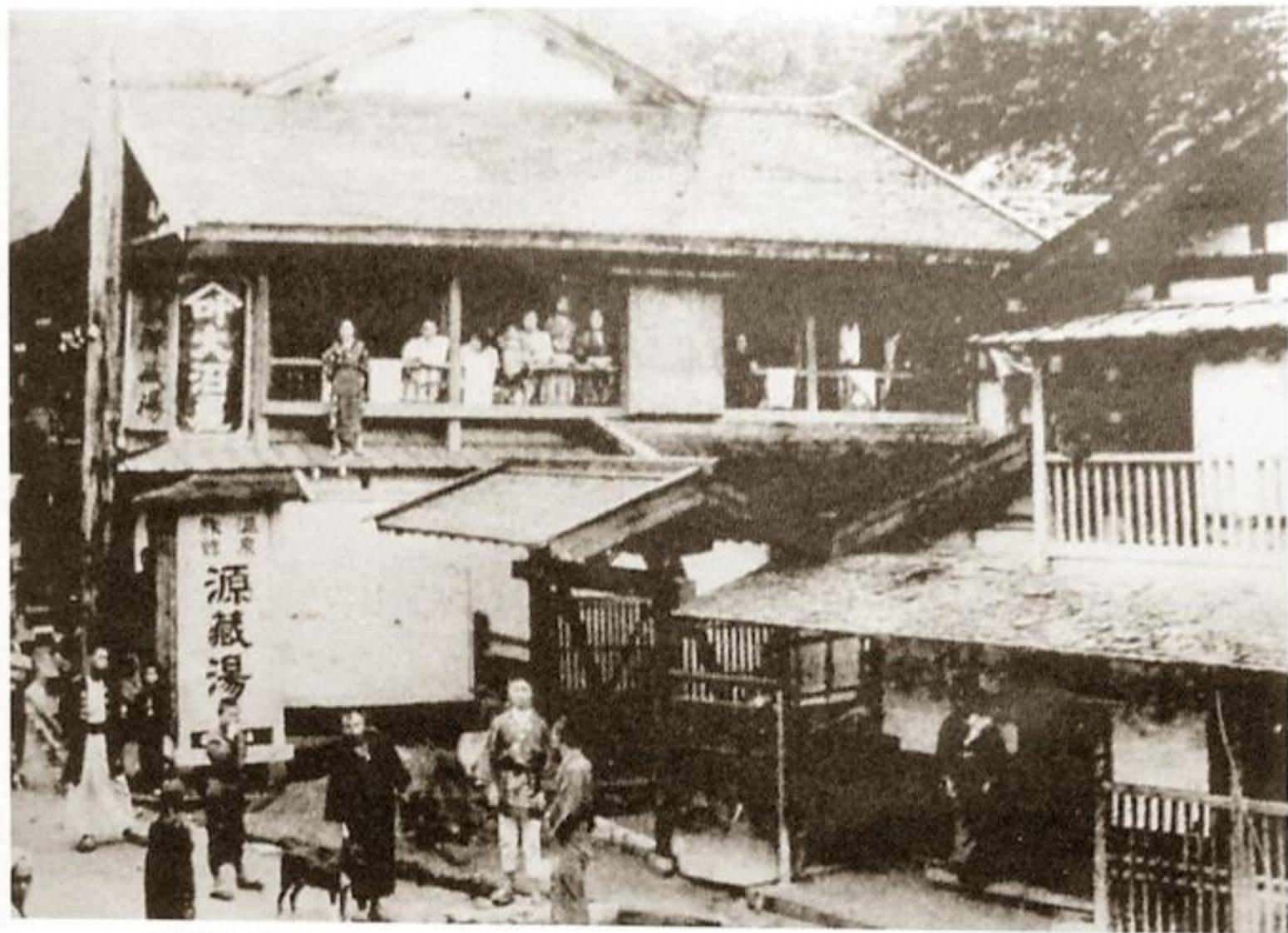
Minamihara Kaitaku

鳴子では鬼首や中山で作られた木地製品や塗り物は古くから売られていた。ただ、鳴子の湯元で木地が挽きはじめたのは弘化年間以後だといわれている。

鳴子こけし発生の第一の契機

(玩具を挽く技術の導入)

- 小田原よりの木地技術と玩具製造技術の伝承
 - 温泉地で木地玩具が人気なことを知った鳴子の湯主たちが集まって相談し、小田原から木地師を招いた
 - 小田原の木地師から源蔵湯隠居家督の大沼又五郎が玩具などの木地技術習得(弘化3年(1846)以降間もない時期)
弘化3年は、又五郎が源蔵湯の隠居家督として婿入りした年
 - 又五郎は腕の立つ工人で、小柄な人だったが、挽いた鉋屑は長くつながり、首からぶら下げて、湯元の坂を走って見せた。



明治半ばの鳴子・源蔵湯（鳴子観光ホテル蔵）



行發店商橋高

湯藏源

館旅湯内

泉温子鳴

(前陸)

鳴子こけし発生の第二の契機 (土産物としての人形)

- 小田原よりの木地技術と玩具製造技術の伝承
 - 温泉地で木地玩具が人気なことを知った鳴子の湯主たちが集まって相談し、小田原から木地師を招いた
 - 小田原の木地師から源蔵湯隠居家督の大沼又五郎が玩具などの木地技術習得(弘化3年(1846)以降間もない時期)
弘化3年は、又五郎が源蔵湯の隠居家督として婿入りした年
- 温泉神社の早坂某が伊勢参りの帰りに購入した木人形
 - 大沼又五郎に同じ様な四寸くらいの木地人形を作らせて、神社のお守りとして販売した。
(高野幸八姉さと(安政3年 1856)生まれの話)

木人形の作者として可能性のあるのは？

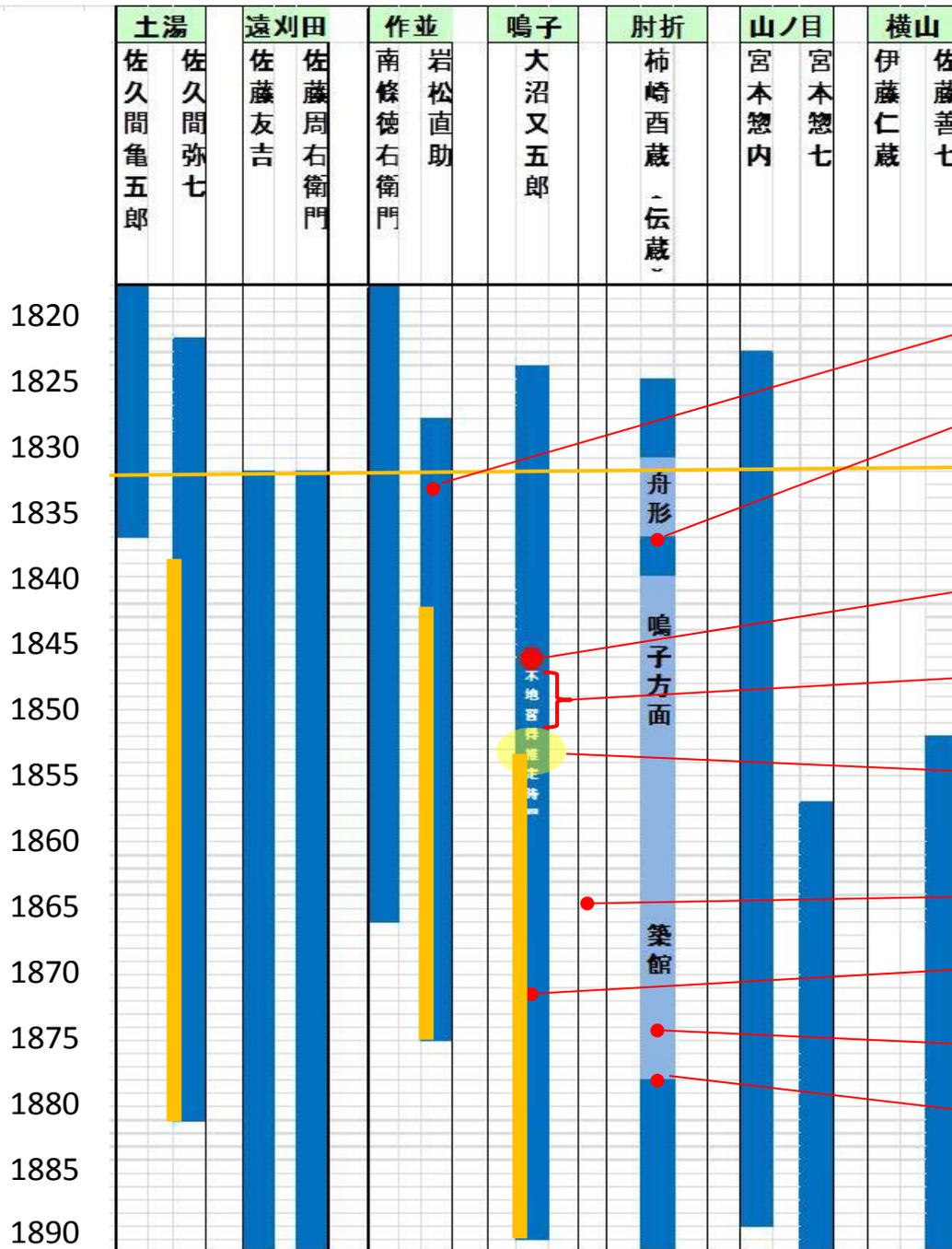
文政

天保

弘化
嘉永

安政

万延
文久
慶応
明治



岩松直助雄勝郡三梨村より作並へ (天保4年頃)

酉蔵肘折に戻り伝蔵家を継ぐ (天保7年)

大飢饉 (天保4年)

又五郎源蔵湯の養子 (弘化3年)

又五郎木地習得時期

湯主たちが相談して小田原より木地師を招く

鳴子こけしの誕生時期

鬼首文書「こふけし」

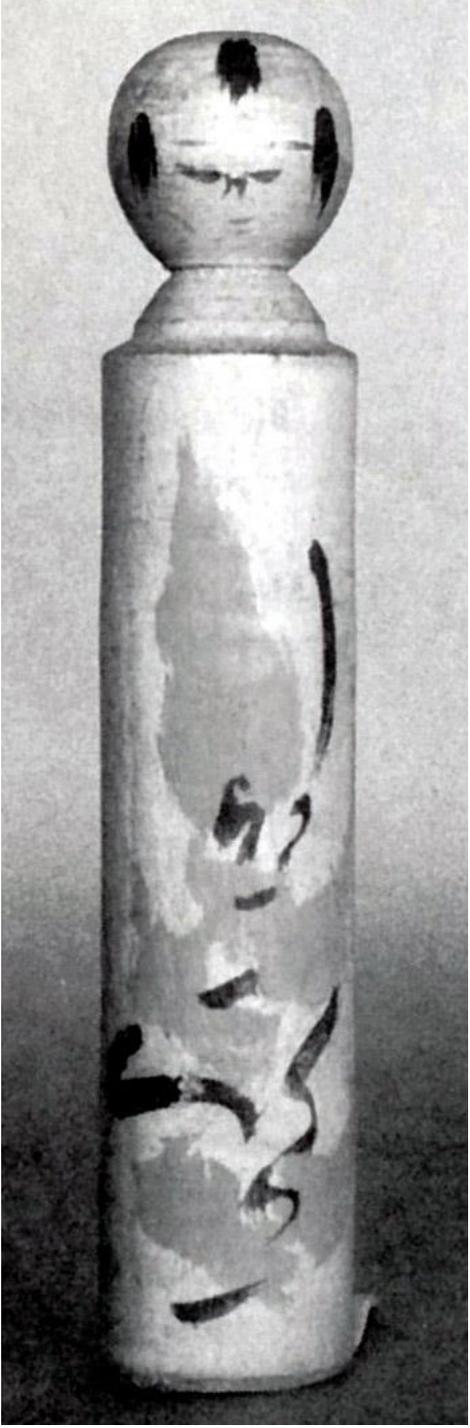
又五郎水澤県で木地講習

築館で肘折伝蔵と呼ばれる

伝蔵、肘折に戻る

宮本惣内、伊藤仁蔵の木地経歴は詳細不明

伊勢参りの帰りに購入した木人形のイメージ



仙台

高橋胞吉



古作並のこけし

今野新四郎か？

小林倉治

倉吉

平賀謙蔵

岩松直助

小松藤右衛門

庄司惣五郎

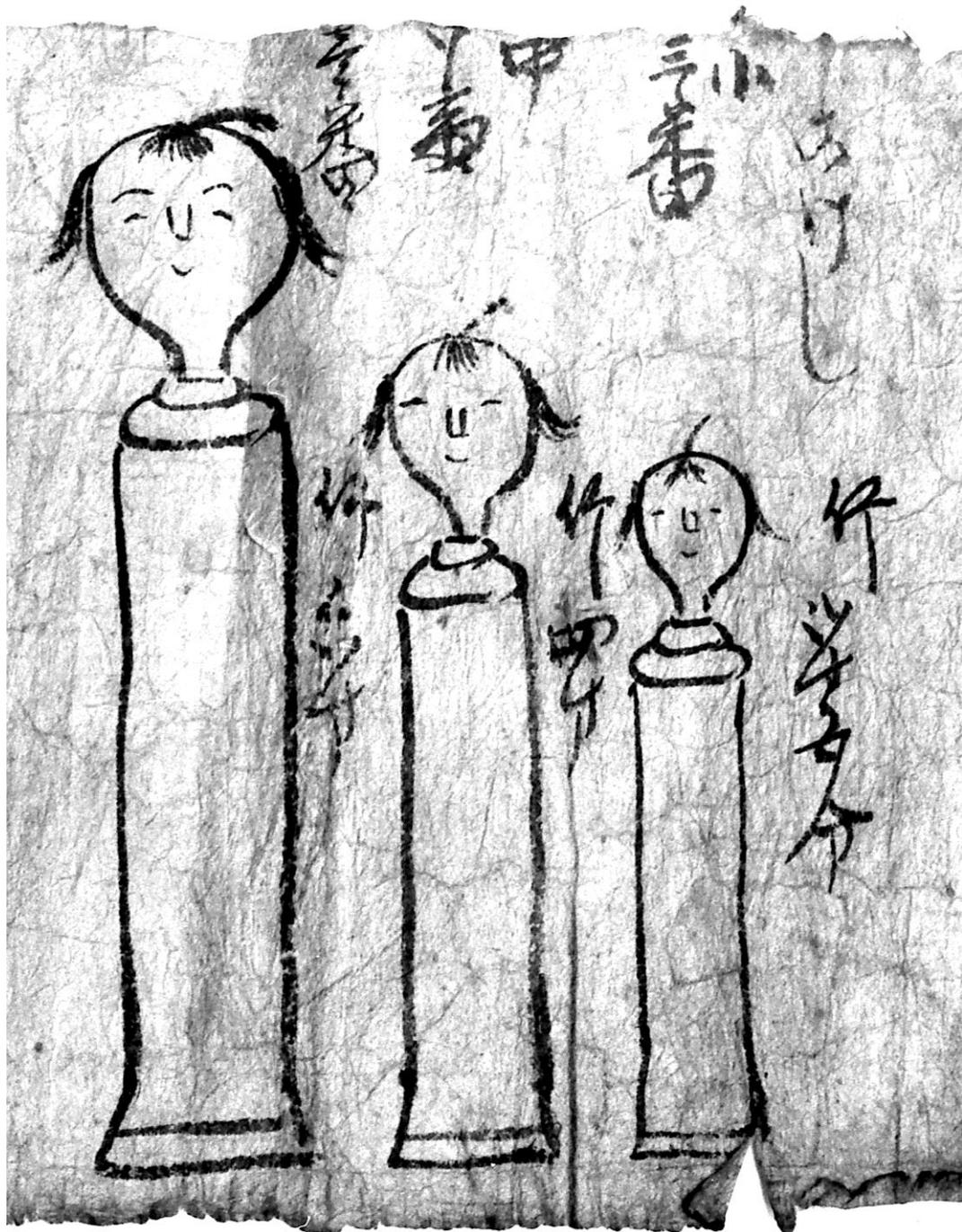
今野新四郎

高橋胞吉

温泉神社の早坂某が伊勢参りの
帰りに購入した木人形のイメージ



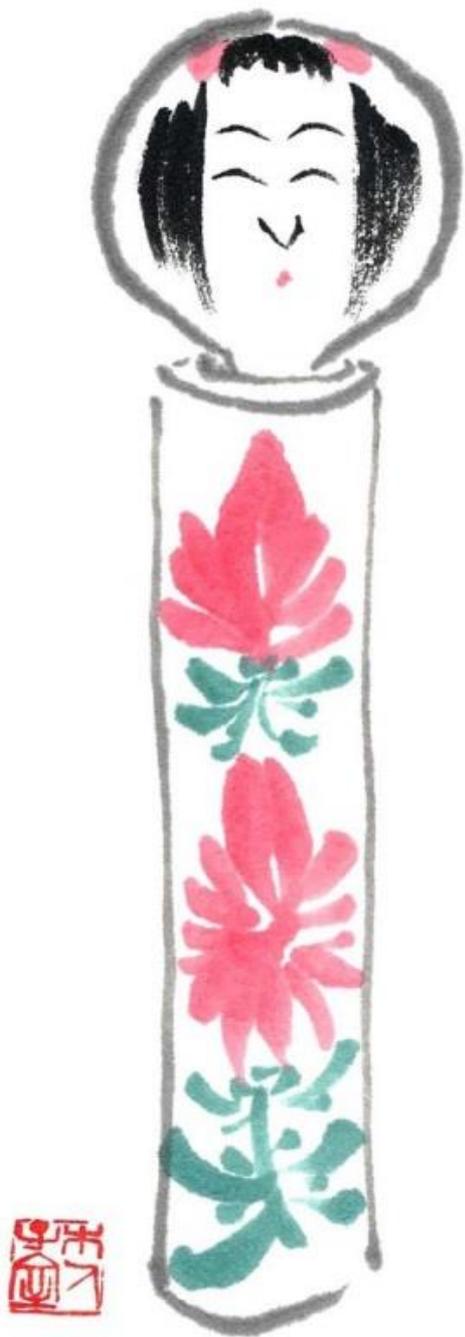
幼い子供が手に握って
遊べるような胴の太さ



伊藤長作文書

最上郡長沢の伊藤長一の家に
伝わった木地寸法帳の「覚」

明治19年8月25日



高野幸八のこけし



横山不動尊門前で売られた

佐藤善七のこけし

深沢要が発見したもの

宮城県本吉郡横山村



佐藤善七の師匠は鳴子で修行した

伊藤仁蔵といわれている。

深沢コレクションの作者不詳のこけし
品川山三から出たもの



勘治一家のこけし



左三本
西田記念館

鈴木康郎蔵

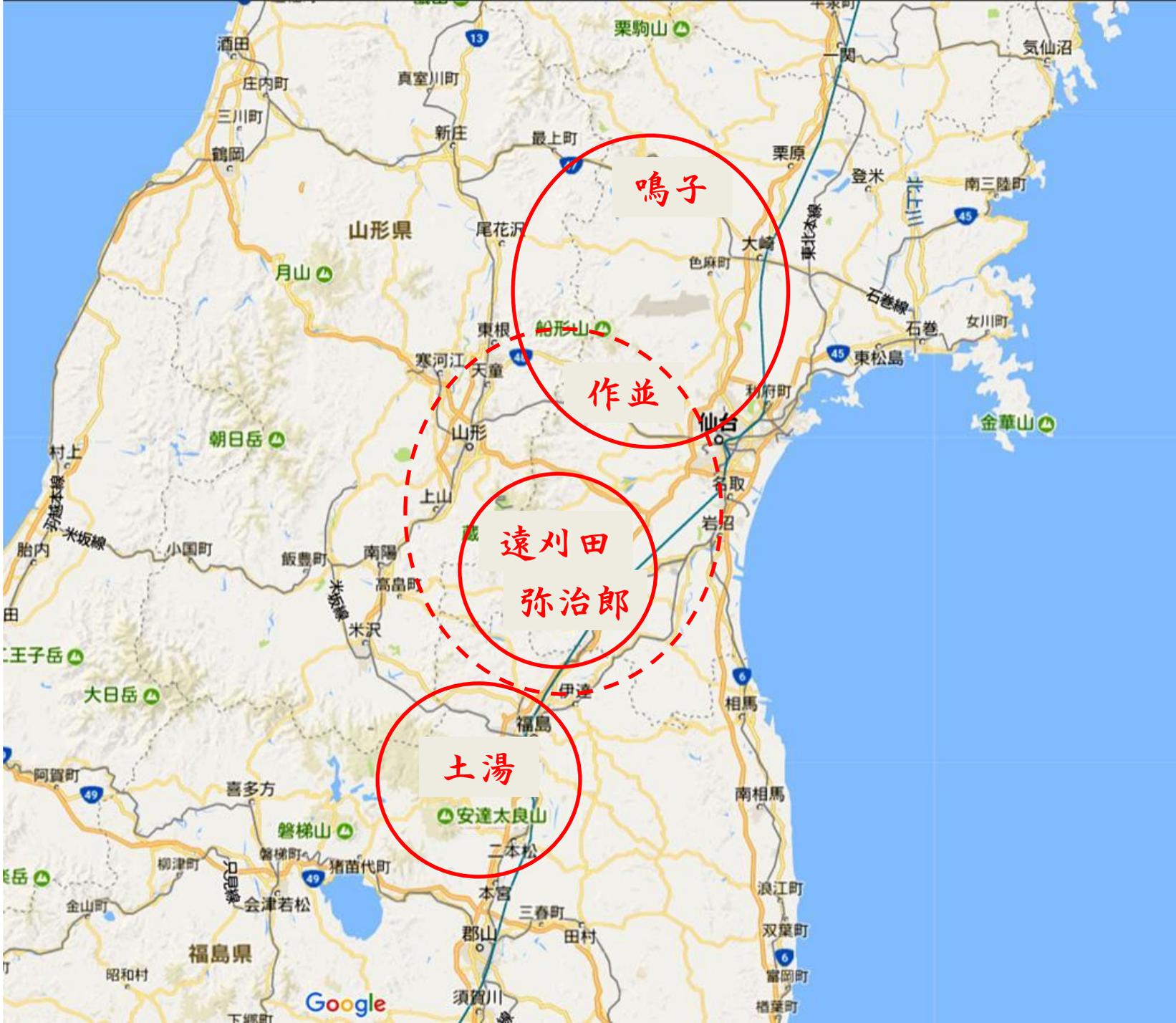


大沼健三郎の細胴のこけし

昭和44年

昭和42年

系統分化以前の
大グループ「圏」の見直し





天江富弥旧蔵



鳴子こけしはどうして

胴の太い今の形になったか？

もとは神社のお守りとして売られた細身の4寸位のもの

伝大沼又五郎のこけし

仙台藩の経済政策

寛永3年(1626) 「買米仕法(かいまいしほう)」

- ・ 農民が領主への年貢を納めた残りの米を藩が強制的に買い上げ、これを江戸の市場へ売却することによって利益の独占をはかった政策

享保十二年(1727) 伊達吉村の経済立て直し (先代綱村の失政回復)

- ・ 「寛永通宝」を石巻で鑄銭(仙台領産の銅)
- ・ 買米仕法の再編強化

宝暦五年(1755) 飢饉

天明期(1782-1787) 冷害、水害仙台藩では餓死者が三十万人

- ・ 金方御用 大阪商人 升屋山片平右衛門が銀主になる
番頭 山片蟠桃(小右衛門) さし米制度 米札(藩札)

银山

文化文政の経済安定期

- ・ 山片蟠桃 文政四年(1821)に亡くなる

天保の飢饉 九十二万石の大減収 補填：三十万両以上

- ・ 預かり手形(藩札)発行の失敗

安政の失政

- ・ 主席奉行芝多民部の失政
中井新三郎(近江出身)による改正手形の発行 軍艦や大砲の建造

文久の経済再建

- ・ 但木土佐による経済の立て直し 緊縮財政の断行
「向こう五年間は、十万石の分限で表高六十二万石の仙台藩を運営する」
文久二年(1862)十月

文久二年

内郡村法曹待合藤清也三様

長蔵

又五郎中、
山根村に於て、
赤物師と号し、
御国産品、
無益之品、
被成下度、
奉存候。

一 子供手翫人形等他所仕入被相留候儀、
別而被仰渡、承知仕候。右之外御城
下并在々町場ニ而赤物師と号し候商人共、
雛等色々張抜もの并山根付村々
出産之木地人形こふけし杯と申様之品、
御国産ニ候共、無益之品ニ相ミへ
申候間、右売買一切被相留候様、
被成下度、奉存候。

一 山根村法曹待合藤清也三様
大造向う四郎武藏守也

鬼首の長蔵文書

文久2年 (1862年)

又五郎が木地を習い始め得る弘化3年の16年後

子供手翫人形等他所仕入被相留候儀、別而被仰渡、承知仕候。右之外御城下并在々町場ニ而赤物師と号し候商人共、雛等色々張抜もの并山根付村々出産之木地人形こふけし杯と申様之品、御国産ニ候共、無益之品ニ相ミへ申候間、右売買一切被相留候様、被成下度、奉存候。

別而 (べっして) = とりわけ 杯 (など) = 等と同じ

高橋勘治のこけし



日本こけし館



西田記念館

角髪（みずら）は、日本の上古における貴族男性の髪型。中国の影響で成人が冠をかぶるようになった後は少年にのみ結われた。

閑話休題

こけしは女の子をかたどった木人形ではない。
水引や角髪を見ても分かるように男の子（童子）をかたどった。



御所人形（西澤人形玩具研究所）

加美郡上狼塚（かみおいのづか）の旧家で

発見された

幕末の作かといわれるこけし



高橋五郎蔵

加美郡上狼塚（かみおいのづか）
の旧家で発見された幕末の作か
といわれるこけしの頭部









奥州一関こけし人形
明治10年代〜24年の宮本惣七

〈うなるの友・初編〉
明治24年

深沢コレクションの
黒こけし



蔵王高湯

岡崎栄治郎

尺九分（33センチ）

東京こけし友の会



仙台屋

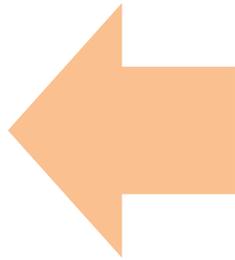


尺（30センチ）



蔵王高湯ではこけしを雛壇に飾る風習が生まれた。飾られるこけしは倒れにくいように太くなった。

湯治のみやげ・厄除けのお守りとして
売られた四寸ほどの細身の木人形は、
赤物師などによって祭日縁日などの露
店で飾り物として売られるようになり、
倒れにくい太身の胴の上手物人形に
なった。



付録

鳴子木地組合のこけし由来記

(赤い紙の印刷物)

「こけし」はケシの転訛にして「厄除子如来」にかたどり厄病除けの玩具に用い、略称「除子」からさらに「こけし」に変わったものである、という説が正しい。

刷り物にはこう書かれていたがヨケシ転化説は俗説

秋山忠の話

横屋の脇から登っていくと大穴の下に厄除子如来があり、鳥居の横には赤い旗が何本も立てられていた。そこに売店がありこけしを売っていた。よく客はここまで登ってこけしを買ったものだ。



鳴子温泉

新屋敷

鳴子温泉

湯元

河原湯

大崎市立鳴子小学校

大穴

厄除子如来



大穴



厄除子如来



と、厄除子如来にかたどり疫病除けの玩具に用る略稱除子トクシから更にこけしと變つたのである。といふ説とがある。

發生地として著名なのは宮城縣の鳴子である。

鳴子温泉に残る文書によると――

玩具こけし

木製人形にし、手なく足なく往古は楯輪と同一目的に用ゐたりしもの漸次美化して今日の玩具とな

(子 這 し け こ 子 鳴)
ヲ 種 數 小 大 但 寸 八 サ 高

二三

こけし這子の名は、土地により、こけし、けし坊主、きぼこ等と呼ばれて居るが、こけしは芥子の轉訛、這子は婢子や奉子等と同一意義である。といふ説

東北土俗玩具案内
昭和三年

完

